

## ニッポンの想像を超える未来

Vol.4

## 2020年、その先の東京の未来

評論家 山田五郎さん

100年後、就活の話をする東京郊外居住の親子  
(プロローグ)

おとうさん：そろそろ就活の時期だね。どんな仕事をしたいの？

子ども：うん、四国にあるインプラントブルデバイス（体内に埋め込むデバイス）の研究施設が第一志望なの。

おとうさん：そうか、今はみんな都心じゃなくて地方で就職するのが普通になったな。

子ども：昔は地方から東京に出て働く人が多かったってホント？

おとうさん：そうだね。東京に最先端技術の会社をはじめ、働く場所が集中していたんだよ。

子ども：えへ、今と反対なんだね。今は、第2の人生を考えるとときにみんな東京に移住するよね。

おとうさん：そうだね。今は地方の好きな場所でテレワークが当たり前。そういえば、おじいちゃんが住んでいる渋谷は、昔は若者文化の発信地だったそうだよ。

子ども：そうなの？ 渋谷って高層ビルと空中回廊の街だよな。何でもそろっていて便利そう。

おとうさん：おじいちゃんも、コンパクトな街でラクだと言っていたな。最近はロボットカーで旅行しているそうだよ。おとうさんもそろそろ都心移住を考えようかな。

## 未来の東京を探るカギは現代に。60年以上、進化が止まらない渋谷



2019年、東京は街の再開発が進行中だ。特に渋谷は街全体にまたがる大規模な再開発で、完成は2027年を予定している。スクランブル交差点のある駅前広場として拡張され、周辺には高層ビルが林立し、駅構内のアクセスも分かりやすくなるという。

2020年に開催される東京五輪に向けてインバウンドが盛んに促進され、海外からの訪日者も急増している。人の往来も激しくなり、街の風景も変貌し続ける東京の未来はどのようになっていくのだろうか。

今回は街や都市の雑学に造詣が深く、テレビやラジオなどでコメンテーターやパーソナリティとしても活躍されている評論家の山田五郎さんに、2020年を1つの境目として「東京の過去と未来」についてお話を伺った。

## ニッポンの想像を超える未来

山田さんは高度経済成長期の1958年に渋谷区で生まれた。山田さんが子どもの頃は、好景気に合わせて街がみるみる変わっていったという。

「子どもの頃、渋谷の中心は、今の109のビルの左側にある道玄坂でした。向かい側には花街があって、鉄道のガード下には焼き鳥店などがありました。今、代々木公園、国立代々木競技場、NHK放送センターがある辺りは、戦後からある在日米軍施設ワシントンハイツでした。これが僕にとっての渋谷の原風景です」。

山田さんが10代の頃に渋谷駅からNHK放送センターにつながる公園通りができ、通り沿いに西武百貨店やパルコが開店した。大学生の頃は、公園通りや道玄坂の横にある小路、百軒店（ひゃっけんだな）にあったライブハウスやジャズ喫茶が盛り上がっていたそうだ。

ワシントンハイツは1964年の東京五輪開催前後に閉鎖され、跡地に代々木公園、国立代々木競技場やNHK放送センターができた。そして、西武百貨店や渋谷パルコの開店をきっかけに、渋谷はファッションやカルチャーの最先端として知られるようになった。

人通りが激しくなったことをきっかけに渋谷駅前の交差点がスクランブル化されたのは、1973年。80年代には、それまで飲み屋が軒を連ねていたセンター街に若者が集まるようになり、「チーマー」や「ギャル」という言葉も生まれた。「SHIBUYA109」が10～20代前半女性のファッションの最先端として人気が出たのもこの頃からだ。



六本木方面から望む渋谷ストリーム  
(写真:渋谷ストリーム)



1955年、宮益坂付近 風景  
(写真:東京急行電鉄株式会社)



1966年 渋谷駅(東口)副都心へ体裁を整えつつある渋谷  
(写真:東京急行電鉄株式会社)

「渋谷は、僕たちの成長とともにどんどん変わっていった。若い頃はそこが魅力でしたが、この歳になるとあまり変わってほしくないとも思ってしまう」と山田さんはこぼす。しかし一方で、交通アクセスは大変便利になったと思うのだそうだ。

現在進む渋谷の再開発で最初に完成したのは、ファッションビルの渋谷ヒカリエ。駅東口にあった東京文化会館の跡地に建てられたものだ。ヒカリエのテーマは大人の渋谷。それまで若者中心だった渋谷に少しずつ大人が戻ってくる兆しとなった。



宮益坂交差点方面よりのぞむ渋谷スクランブルスクエア完成  
予想図  
(写真:渋谷駅街区共同ビル事業者)

続いて、地上にあった東急東横線と新しくできた東京メトロ副都心線の相互直通運転の開始で地下化され、旧東横線渋谷駅のホームや線路跡地、渋谷駅から国道246号線をまたいだ先に複合施設の渋谷ストリームが誕生。その先から代官山につながる通りに渋谷ブリッジができ、長い間暗渠（あんきょ）となっていた渋谷川が再生して遊歩道が整備された。道玄坂上には、大規模なオフィスビル、渋谷ソラスタが完成。

今後予定されているのは、渋谷駅の真上に、スクランブル交差点を見下ろせる高さ約230メートルの高層ビル、渋谷スクランブルスクエア、東急プラザ渋谷跡地に複合施設の渋谷フクラス、そして、駅南西部には、生活支援、起業支援の施設が誕生する。これらの完成で、渋谷駅から歩道橋で渡るしかなかった国道246号線、その先の代官山までのアクセスが格段に良くなるという。

2027年には、今まで途絶え気味だった渋谷から代官山までの人の流れが大きく変わりそうだ。

## 東京は世界でも珍しい入り組んだ坂の街

世界中のほとんどの都市には、ダウンタウンとヒルサイドがある。海や川に近い場所は交通の便がいいので商工業が栄えていく。そしてその上側に住宅街が広がる。

「それが街の基本的な構造。でも東京は、台地が5本の指のように張り出して低地と複雑に入り組んでいるんです。こういう都市は珍しい」と山田さんは言う。山田さんは、台地と低地が交差するJR山手線の内側、特に上野から田端にかけての風景が好きなのだそうだ。

「東京は坂の街。上野は世界でも類を見ないほど多くの文化施設が密集している場所ですが、張り出した台地の先端にある坂の密集地でもあります」。

例えば、山田さんが勤めていた講談社がある文京区音羽から上野まで最短距離で行こうとすると、坂の上り下りが3.5回あるという。

「町名が同じでも、坂の上と下では街の表情がまるで違う。それが東京の魅力でもあるんですよ」。





## 80年代のバブル景気時期には街の個性が作られた



環八通り沿いに健在のM2ビル。現在は東京メモリードホール  
(写真:株式会社メモリード東京)

80年代に入ってバブル景気時期に突入すると、街には次々と個性的な建築物が建ち始めた。

「それまでは合理的、機能主義的な建物が主流でしたが、バブル時期に入ると、さまざまな時代の装飾様式がごちゃまぜに取り入れられたポストモダン建築が流行しました。建築家の隈研吾さんや、プロデューサーのシー・ユー・チェンさん、イギリス人建築家のナイジェル・コーツさんなどが、建築資材にもデザインにもお金をかけて、街のシンボルになる建物を次々と誕生させていました」。多くは取り壊されてしまったが、西麻布のザ・ウォールや環八通りに建つM2ビル(現・東京メモリードホール)などは健在で、今も異彩を放っている。

これらの特徴のある建物のおかげでひとつ一つの街の個性がはっきりしていたバブル時期。個性的な店や場所が次々とでき、山田さんの編集者時代には話題に事欠かない時期だったようだ。山田さんは、「今は、バブルの前よりさらに合理的、機能主義的でミニマルな建築が増えているような気がします。シンプルで使いやすくおしゃれではありますが、どうしても同じ印象に見えてしまう。ビルも高層化するばかりで特徴がなくなり、結果として街の個性が失われてきているのではないのでしょうか」と危惧している。

希望が持てるのは、都内の商店街。地方の商店街は問題を抱えているという話をよく耳にするが、都内の商店街はどこも人の往来が多くにぎわっている場所も多い。「人の往来がある限り、未来の東京でも商店街という形態は残っていくと思います」。

## 若者は地方へ、コンパクト化した東京はセカンドライフを送る場所に

バブル時期に東京は地価が高騰し、人も開発も地方へ分散されていた。分かりやすいのは、大学の移転だ。都心にあった大学は広大な敷地を求めて地方へと移った。しかし、今、若者人口の減少とともに人材の獲得競争が激しくなり、都心回帰が起きている。2020年の東京五輪の後には、さらに都心に集中し、大学だけではなく、住宅の都心部の供給も増加していくだろう。

「東京はコンパクト化され、縮み志向が強くなっていくのではないのでしょうか。コンパクト化された街は、生活に必要なものやことが近くなるので高齢者にとってもありがたい。そうすると、街には高齢者向けの施設が増加していく」。すでに文京区では、子どもの人口減少で閉校となった中学校跡地をはじめ、次々と高齢者のための住居や施設が建設されているのだそうだ。

そこで山田さんが思うのは、「若者はむしろ東京を出て地方を活性化したほうが暮らしやすいのでは」ということ。住宅にかかる費用が高い東京では、若者や子育て世代が暮らしていくのは何かと大変になる。子育ても地方でのびのびと行い、体がきつくなってきたら、コンパクト化された都心に戻ってくるのが理想。

「すでに仕事はどこでもできるように環境は整ってきている。5Gが普及すれば、東京にいなくても仕事がスムーズにはかどるでしょう」。5Gなどの新たな技術への期待度は高いと山田さんは言う。近い将来、地方で自分の時間軸で仕事をし、おじいちゃんおばあちゃんに会いに東京へ出かけるという時代が訪れるのかもしれない。

「課題として残るのは、ビジネスのグローバル化やインバウンド促進で海外から東京に移住してくる人々に対応する諸制度の整備です。今のあやふやな状態では双方が幸せにならない。ここをきちんと対応すれば、もしかしたら、異文化が融合した面白い文化が生まれ、街に新たな個性が根づくかもしれません」。そうすると、未来の東京はもっと面白くなりそうだ。



### プロフィール

#### 山田五郎(やまだ・ごろう)

編集者／評論家。1958年、東京生まれ。上智大学文学部新聞学科卒業。大学在学時に、オーストリア・ザルツブルグ大学に1年間留学し、西洋美術史を学ぶ。卒業後、講談社に入社。『Hot-Dog PRESS』編集長、総合編纂局担当部長を経てフリーに。西洋美術、街づくり、時計、ファッションなど、幅広い分野で講演・執筆活動を続けている。「出沒! アド街ツク天国」(テレビ東京)、「ぶらぶら美術博物館」(BS日テレ)など、テレビ、ラジオへの出演多数。『知識ゼロからの西洋絵画入門』(幻冬舎)『へんな西洋絵画』(講談社)など著書も多数ある。

